死者たちのロッキード事件

猪瀬直樹
inose naoki

文春庫

文春文庫

431—2

死者たちのロッキード事件

定価はカバーに表示してあります

1987年5月10日　第1刷

著　者　猪瀬直樹
発行者　西永達夫
発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3—23　〒102
TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本　Printed in Japan

ISBN4-16-743102-5

文春文庫

死者たちのロッキード事件

猪瀬直樹

文藝春秋

目次

序　章　象徴としての角栄、象徴としての死者　7
第一章　五億円を運んだ男の災厄――笠原政則　15
第二章　「航空界のジョン・ウェイン」が遺した火宅――大庭哲夫　63
第三章　黒幕を操った日系二世の存在証明――福田太郎　105
第四章　空白の遺産――平和のなかの〝戦死者〟たち　153
終　章　そして角栄だけが残った　205
あとがき　243
解説　吉岡　忍　245

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

死者たちのロッキード事件

序章　象徴としての角栄、象徴としての死者

日本国憲法第一条は、天皇についての定義から始めている。

「天皇は、日本国の象徴であり日本国民統合の象徴であつて、この地位は、主権の存する日本国民の総意に基く」

では、少し皮肉を込めて「戦後民主主義の象徴」は、と問えば、大正七年生まれの田中角栄ということになろうか。しかし、その「地位は、主権の存する日本国民の総意に基」づいては必ずしも、いない。いないけれど、「国権の最高機関」である国会（憲法第四一条）で、田中が率いる自民党議員は百十九人にもおよぶ。私的党派が立法府を牛耳っているのが実情で、そればかりでなく、闇将軍として時の政権を背後で操り、行政府をも掌握しているのである。

昭和五十八年十月十二日、その日、戦後デモクラシーにとって、そしてその象徴としての田中角栄にとって〝最後の審判〟が下されようとしていた。すでに国会は、田中というモンスターの専横を防ぐ手立てを失っていた。国会は、自らを浄化する能力をもたなかった。戦後最大の疑獄事件の主役としての田中角栄を裁くのは唯一司法権力のみでしかない、というところまで追いつめられていたのである。

東京地裁七〇一号法廷で、田中角栄ら五被告に有罪判決が下されたその歴史的一瞬を、僕は傍聴席でじっと見詰めていた。

判決の第一声が岡田光了裁判長の口から発せられたのは、午前十時二分であった。

「五人の事件を併合して、判決を言い渡します。被告人、前へ出てください」。傍聴席を背に右側から、元総理大臣田中角栄、元首相秘書官榎本敏夫、元丸紅会長檜山広、元同専務の伊藤宏と大久保利春、という順に並んだ。一呼吸おいて、岡田裁判長が主文を読み上げた。

「田中に懲役四年、追徴金五億円」

以下、榎本、檜山、伊藤、大久保と判決が言い渡されていった。

被告席に戻るとき、田中は口を歪(ゆが)めて笑った。東映の時代劇やヤクザ映画の悪役のような、そんな不敵な笑い方で瞬時、判決のショックをかわそうとしたがどうしてもわざとらしさを消すことができなかった。その後、腕を組み、瞑目しながら苦痛に耐えるように、天を仰いでいえぐようだった。

実刑判決は田中にとって大きなダメージであった。が、ただちに控訴と保釈の手続きをとった田中は、早坂茂三秘書を通じて議員辞職の意思のないことを内外に伝えることになる。司法に断罪されても、立法府と行政府に絶大な権力を行使できる田中角栄は不滅、なのであった。

こうして、ロッキード裁判はその一幕を閉じ、二審、三審と再び時間を弄(もてあそ)んで、いつしか終幕に向かうのであろう。その間に、事件の生なましさは次第に風化していくことになる。記憶ほど、日々に疎く、時間に無抵抗なものはない。しかし、そんな事態の推移にあらがおうと

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

してか、この事件で抹殺されていった死者たちは、かすかな爪跡を刻みつけていったのである。彼らの残したシグナルをたんねんに読み込みながら、この疑獄事件の基層に隠されている〝戦後という時代〟を捉え直すことにした。それが、田中角栄の時代の再検証となり、ロッキード事件の洗い直しになると信じるからだ。

僕は、田中角栄に判決が下された数日後、故笠原政則運転手の実母である七十五歳の笠原みつを訪ねた。みつとは、これが初めての出会いではない。田中に論告求刑があった昭和五十八年一月二十六日、彼女はこうつぶやいていた。

「こんなもん（懲役五年・追徴金五億円の求刑）、死刑じゃないから……」

練馬区役所にはほど近いが、商店街からはちょっと外れている場末の二階建て木造モルタルのアパートは昼間でも廊下の奥が薄暗く、すれちがうのは老婆ばかり、都会の姥捨山（うばすてやま）という風情だが、笠原みつはそこでたった独り和裁の仕立で日々の糧（かて）を得ていた。再訪した僕は、彼女の六畳一間のすみかの、裁縫道具の脇で、テレビ報道の画面を見ながら、ロッキード事件の社会的拡がりというものについて考えていた。田中に有罪判決が出たいまでも、この年老いた母親にとって、昨日と明日になんの変化も見出すことはできないのである。

笠原みつは「田中が憎い……」と、フッと漏らしたが、そういう言葉しか彼女は言い表す方法をもたない。

白昼のショーのように繰り広げられた裁判劇、田中角栄現象の熱狂のなかで、いつのまにか死者たちを忘却の彼方に置き去りにしてきたのではなかったか。遺族は死者たちを小さな家のなかで、あるいは心の空洞に不在の空間としてつねに意識しているが、僕たちはそうではない。ちょうど笠原運転手の本籍地、高崎市阿久津甲一二四七が開業したばかりの上越新幹線の橋梁の下でその痕跡すらとどめていないことと同じように、すっかり忘れてしまっているのである。

ひとりの運転手の死など、一国の宰相にとって路傍の石ころのようなものかもしれない。しかし、その石ころの証言が五億円授受立証のキイポイントとなったのであり、田中角栄は、長い公判のあいだ中、最後の最後までそれでつまずきつづけたのであった。笠原運転手は、借家を転々とした末にマッチ箱のようなマイホームを手に入れるのだが、ちょうどそれと重なる時期に五億円授受の現場に立ち会ったのである。取調べ室で彼の記憶の糸が、そういう個人史を反芻するなかでたぐり寄せられていったからこそ、確かな証言になったにちがいない。

人は誰でも暮らしのビジョンをもっている。総理大臣という最高の栄達をきわめた田中角栄も、かつては貧しく旧制中学に進学できず、母親フメは、高等小学校を終えたら越後線の切符売りにでもなれれば望外だと考えていた。田中の大きな野心と、一介の運転手のマイホーム獲得の小さな夢が、使用者と被使用者の境目を越えて、裁判劇を下から隆起させていったのである。

そうした隠れたドラマは、笠原運転手に限ったことではない。事件のなかで消えていった死者たちのすべてにあてはまる。元全日空社長の大庭哲夫の場合にも、田中角栄とのあいだに人に知られぬ小さな接点があった。ヒコーキ野郎として実直に生きた大庭哲夫が田中と交錯した一瞬のドラマは、ロッキード事件が露顕したときに初めておおやけになるのであった。児玉誉士夫の陰で、黒子（くろこ）として生き、死んでいった福田太郎にも同じことがいえる。単なる通訳と思われていた福田がこの疑獄事件のなかで果たしていた役割は意外に大きいのだが、それは日系二世としての個人史が彼の役割を宿命にまで追い詰めた結果であった。

児玉邸のガサ入れに参加した税務査察官、セスナ機でやはり児玉邸に突っ込んだポルノ俳優、ロッキード社コーチャン副会長を執拗に追跡していた日本経済新聞記者、ロッキード社の尖兵（せんぺい）として売り込みに奔走した丸紅社員、それぞれの個人史はロッキード事件と交錯しながら、事件を契機としてその運命は大きく破綻して死者の列に加わっていった。あげくは家庭の崩壊にまでゆきつく。

彼らの死は、共通したひとつのことを語っているように思われてならない。それはこの戦後最大の疑獄裁判の主役を演じつづける〝田中角栄の時代〟が象徴するものの意味である。その意味はいまだ明らかにされていないのではないか。ロッキード事件で田中角栄が踏み台にしていった死者たちの声が、次第に遠景に退いていくこの疑獄裁判を監視しているのではないのか、

そんな思いに囚(とら)われるのは、僕が死者たちの現場を歩いてきたせいなのかもしれない――。

第一章　五億円を運んだ男の災厄——笠原政則

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com